折口信夫の晩年

岡野弘彦

慶應義塾大学出版会

折口信夫の晩年

一

昭和二十年の秋深くなってからである。折口先生から歌の指導を受けている短歌結社鳥船社の歌会が、国学院大学の院友会館で開かれた。それは、戦後二度目の鳥船社の歌会のはずである。
私はこのときはじめて歌会というものに出席して、鳥船社の一人に加えてもらった。引っ込み思案な私に入会をすすめてくれたのは、同級生の千勝三喜男君である。彼は二年前、大学予科入学と同時に、「鳥船」に入っていた。
会が始まる前、会館の裏のあき地で庭木の枯れ葉を集め、火を焚いて、先生にあげるための茶をわかした。当時、夕方の二、三十分に限って、螢火のようにともるガスの火など、気やすく借りるわけにはいかなかった。
真っ黒にすすけた薬罐に湯のたぎりだす頃、あたりはすっかり暗くなっていた。
燃え残りの火を踏みにじる足裏に、大きすぎる復員靴は、ずるずると、変に頼りない踏み心地であった。それは、ほんの四、五か月前、霞ヶ浦をめぐる松山の中をあちこち野宿して移動しながら、朝夕、飯盒の飯をたきあげて後の火を踏み消すたびに、足裏に感じていた触感である。

軍隊で感染して、全身の皮膚にひろがってしまっていた疥癬を、復員後二月あまりかけて直して、この歌会の半月ほど前に、私は上京して来ていたのである。

お茶をいっぱい満たした、先生専用の湯呑を持って、二階の会場に入っていった。教場のようにがらんとした部屋には先生を真ん中にして、その両脇に石上堅氏、米津千之氏、そして二十人ほどの鳥船社の同人が両側に分れて席についている。天井の高い所に、裸電球が一つぶら下っていて、そのうす暗い光の下で向きあっている人々の顔は、暗く頬が削げて、沈痛な表情であった。

先生の顔も、昼間の教場で見るときよりは一層、疲労の色が目だってみえた。

会のはじめに、その日新しく加入した二、三人の者が自己紹介をして、歌を二首ずつ読みあげた。私はその前年、学徒動員で豊川海軍工廠にいたとき作った旧作を読んだ。同人の人たちの批評があってのち、先生は、

「生きていて、こうして早く帰って来ることのできたことを、幸福だと思わなければいけない。……」

といわれた。

歌を書くための半紙がなかったのだろうか。あるいは、電灯があまり暗すぎたためだったろうか。同人の人々の歌も紙に書くことをしないで、作者が二度読みあげて、そのまま批評に入った。

歌を読む声は、多くは低いつぶやきのようであり、批評のことばは、途切れたかと思うと、又つづいた。同人の批評に区切りがついた後、言い出される先生のことばだけが、声は低いのだが非常に明晰に、末座の私の耳にもとどいてくる。それがまた一層、部屋の空気を厳しいものにした。

夜が更けるにつれて、ガラスの割れたままになっている窓から吹き込む風が激しくなって、まるで野外の、哀切に満ちた宗教儀礼の場に臨んでいるような気がした。自分が今まで漠然と考えていた歌の会の雰囲気とは、あまりに違いすぎているという疑問を感じていた。そんな私に、千勝君は、先生の御養子の春洋さんが硫黄島で戦死し、藤井貞文さんや伊馬鵜平さんら、主だった先輩の生死のほどもまだわからない鳥船社が、以前のような活気を取りもどすのには、も少し暇がかかるだろうということを聞かせてくれた。

歌会が終って後、階をくだり、玄関の壁に身をささえて靴をはかれる先生の、足もとの不安定さが異様であった。米津さんたちを従えて、暗い戸外へ去ってゆかれる後姿の、がっしりとした肩はばに、耐えていられるものの重さをありありと感じ取ることができた。

部屋の片づけを終って、私たちも帰途についた。氷川神社の森とむかいあって、国学院の講堂が、月の冴えた空を黒々と限っていた。その暗い壁面に沿って歩いていると、ちょうど二年前、この講堂で行なわれた出陣学徒壮行会の光景が、いま眼の前に繰りひろげられているもののように鮮やかによみがえってきた。

その日私は、出陣する人々を送る側の一人であった。しかし、あのとき、制服の肩をひしひしと寄せ合って講堂に居並んだ学生の心は、送られる者も送る者も一つであった。出でて行く日を、数日の後に控えている者と、二月後、三月後の未知の日に控えている者との違いだけである。かずかずの激励のことばが送られた後、最後に折口先生の作られた壮行歌を、旅行中の先生に代って高崎正秀教授が朗読された。

学問の道

国学の学徒の部隊（イクサ）
たゝかひに　今し出で立つ。

国学の学徒は、若く
いさぎよき心興奮（ホコリ）に、
白き頬　知識に照り
清きまみ　学に輝く。

いくさびと　皆かく若き
見つゝ　我（ワレ）　涕流れぬ。

……………………

学徒兵を送るためのその長歌が、「学問の道」という題であることが、まず私たちの心にすがすがしい緊張感を感じさせた。詩が中程まで読みすすめられてゆくうちに、講堂をうずめる学生の間に、感動を押えかねた声にならぬうめきのような声がおこり、最後の反歌が読み終えられてのちも、その切迫した声のざわめきはしばらくやまなかった。

汝（ナ）が千人（チタリ）　いくさに起（タ）たば、
学問は　こゝに廃（スタ）れむ。
汝（イマシ）らの千人の　一人
ひとりだに生きてしあらば、
国学は　やがて興らむ。

ますら雄のわかるゝ時は、
いさぎよく　わかるといふぞ。
汝（ナレ）が手を　我に与へよ。
我（ワレ）が手を　きしと　汝（ナ）はとれ。

国学の学徒は強し。
いでさらば、今は訣れむ

反　歌

手の本をすてゝたゝかふ身にしみて　恋（コホ）しかるらし。学問の道

この詩には、当時の私たちの心の底に沁みわたってくるような温かさがあった。小学生になった

頃から、ひたすらな戦いへの傾斜の中で育ってきた私たちの世代であった。戦いの場に出てゆくことにいまさら何のためらいも感じはしなかったけれども、同時に、せっかく志したばかりの学問の世界へのあこがれを押えることはできなかった。新聞や教場で見聞する学徒兵壮行のことばの多くは、その学問へのあこがれをまず捨て去って、切迫した祖国の難を守るために、いさぎよく死地に身を置くべきことを、繰り返しさとしていた。そういう激越なことばかりを聞かされていると、静かな覚悟を胸に秘めた上で、なおわれわれ若者の心の底ににじみ出してくるひそかな悲哀の思いを、この大人たちは一度でも考えてみたことがあるのだろうか、という気がしきりにしてくるのだった。折口先生の詩は、思っていても口に出すことを許されない、当時の私たちの哀しみの思いに、深く触れてくるものを持っていた。先生がこの詩のなかで、学問のためには、千人のうちのせめて一人だけでも、命を保って帰れという、このつつましやかな歎きのことばを言われるのにも、当時としてはかなり勇気と自信の要ることであったはずだ。

壮行会の翌日、われわれの教場へずかずかと入り込んで来た数人の上級生がいきなり、

「昨日の折口教授の詩は惰弱である。」

と、激しい口調で非難の演説をはじめたとき、私たちはそういうことのあるのを予期していた平静さで、その荒っぽい演説を聞くことができた。彼らが壇を下りるとき、拍手はほとんどおこらなかった。多くの若者の思いはみな同じであったのだ。

書道の先生、羽田春埜氏の美しい仮名書きの手で浄書せられたこの詩の縮写写真を、われわれは一枚ずつ学校からもらって出征した。そういう計らいをしてくれる大学に、私はある信頼感を持つことができた。

戦後三月を経た今、教場にもどって来た者はまだきわめてまばらである。ソ・満国境で死んだといい、特攻隊で散ったという友人の情報が、学生の間で、しきりにささやかれていた。廃墟のようになった渋谷の坂を下りながら、命あって再び教場に帰り、あの詩をわれわれに与えてくれた先生の講義を聞くことのできる身のよろこびを思わずにはいられなかった。

翌二十一年になると、歌会が開かれるたびに、新しく復員して来た人々の顔が加わった。一月には池田弥三郎氏が宮古島から、三月には伊馬さんが中支から帰って来られた。自由ヶ丘に下宿していた私は、一駅隣の緑ヶ丘の伊馬さんのお宅へときどきうかがうようになった。伊馬さんが鵜平という戦前からの筆名を、先生のすすめで春部と改められたのも、その頃のことだ。万葉集の、「今さらに雪ふらめやもかぎろひの燃ゆる春べとなりにしものを」によった命名である。

伊馬さんの家の玄関には、赤い土の鈴が吊ってあって、その下に、

　とざしつつ眠ることありはろばろのまらうどならば鈴ふりたまへ

と書いた木の札がさがっていた。

最初に訪ねたとき、私はその鈴を振ってみたが、素焼の土の鈴は、ほとんど響きらしい響きを立てなかった。よく見ると、鈴のそばにはちゃんと呼びりんの白い押しボタンが取りつけてあった。実用はそちらの方で、ということだったのだろう。しかし、その鈴と歌には、訪ねる者の心にまずやわらぎを与える効果があった。

当時の伊馬さんは、いつ行ってみても、日当りのよい縁側に机をすえて、背中に陽をあびながら、原稿紙にむかっていられた。紺色のコールテンの上衣は、前の方は真新しいのに、肩から背にかけ

ては、すっかり色が褪せてしまっていた。
学校の講義に出てくる学生の顔も、次第に多くなってきた。しかし、教場の風景は殺伐としたものであった。戦場や軍隊で身につけた荒々しさと、敗戦の虚無感をまだ拭い去ることのできない若者が、削げた頬に鋭い不信の眼を光らせ、半長靴で床板を踏みならして歩いていた。
後に発表された先生の詩「日本の恋」のなかに次のような一章がある。

青年の神経は　蝙蝠のやうにうら枯れ
青年の容貌は　穿山甲の如く這ふ
　生き難い島の日を　生き戻り
青年の血液は、唯一疋のおほ蜥蜴だ—。
悲しむにも　怒りを以て表情する—。

こうした、暗い学生の心に、何とかして早くやわらぎを与えようと思われたのであろう。十一月の国学院の大学祭には、先生が「芹川行幸」と「川の殿」という二つの戯曲を作られて、郷土研究会の会員が講堂で上演した。「芹川行幸」は西角井正慶・高崎正秀両教授が主演で、伊馬さんが演出、慶應側から池田弥三郎氏や戸板康二氏も出演し、先生自身も鳳輦の中の仁和のみかどの声を聞かされた。「川の殿」の方は学生が主演で、乏しい物資を集めて来て、さまざまな河童の扮装や、舞台の装置を作るのに苦心した。
上演の二、三日前の日であった。稽古のために右往左往していてほんの数分、研究室が空になっ

たあいだに、そこに掛けてあった先生のオーバーが盗まれてしまった。その日の当番に当っていて、研究室の鍵をあずかっていた私は途方に暮れた。米津さんたちと手分けして警察にとどけたり、道玄坂の古着屋を幾度びか探したりしたが、見つけることはできなかった。そののちの先生は、春洋さんの残してゆかれた陸軍の将校外套を重そうに着てこられるようになった。きっと身近の人に対してはお小言があったのだろうと思うが、私などの耳にはとどいてこなかった。それだけに、一層、長い将校外套の裾を、さばきかねるようにして足どり重く歩かれる後姿を見るのは、つらかった。

そんな私をいたわってくださったのだろうか、あるとき廊下で振り返って、

「岡野はまるでお白粉でもつけているみたいに、いつも白い顔をしているんだね。体は元気なのかね。」

などといわれた。

この年の大学祭に、先生は学生のためにもう一つ、「国大音頭」の歌詞を作られた。それを先生にお願いしたのは、その年の文化部の委員をしていた学生、千勝三喜男・金子良の両君であったはずだ。

どこもかしこも灰だらけ
廃墟の中にくっきりと
立った姿に泣けてくる
あゝ　国学は亡びず
サノエ〱　サノエッササ

ではじまる、四章の歌詞であった。歌詞はできたが、正式に作曲を頼むあてがなかった。先生の研究室に集まる学生が、いろんな歌のふしで歌っているうちに、鈴木正彦助手が、「炭坑節」で唄うのがいちばんふさわしいと言い出した。皆で唄ってみると、なんとなく妥当感があるような気がしてきて、結局、先生にも許しを得て、「炭坑節」で唄うことになった。

踊りの手は、たしか、花柳一輔という師匠に振付けしてもらった。十人ほど、門下の娘さんをつれてきて、まだ、空襲の傷跡のなまなましく残っている講堂の屋上で、われわれに教えてくれた。踊りの輪をつくって、振り袖の女性から踊りを習っていると、戦いの中で怱忙と過ぎた少年の日に、心ならずも見残した遠い夢の楽しさを、いまやっと少しずつ取りもどしているような気がしてくるのだった。

その翌々年の「国学院新聞」に、先生はこの歌について、「戦争以来若い者、殊に学生がすべての喜びを失ひ、それが一番私には悲しいことでありました。何とか皆に楽しませたいと思ってゐた時に、『国大音頭』を作って貰ひたいとのことで、喜んで作りましたが、まだ完全とは思ってゐませんでした。……」と書いていられる。

「国大音頭」は、われわれが卒業してしまった後は、踊ることがなくなり、やがて、唄うのもあまり聞かなくなってしまった。――どこもかしこも灰だらけ――の廃墟の印象が薄れるとともに、だんだん、この歌のもつ切実さもわからなくなってしまったのであろう。

やはり同じ頃、先生の詩、「やまと恋」を、当時国学院に置かれていた、女子教養部の学生に朗読させて、聴かせてもらった記憶がある。何かの研究会か講演会の後だったと思う。

をみな子よ──。恋を思はね。
美しく　清く装ひて
誇りかに　道は行くとも、
　倭恋　日の本の恋　妨ぐる誰あらましや──。

いま活字で読んでいると、少し面映ゆくなるような、甘く華麗なことばも、あの頃の殺風景な教場で、珍しく和服をつけた女性の口から朗読せられると、しんと心に沁み込んでくるような悲しさがあった。
　おそらく、女子教養部の主事であった、今井福治郎氏と相談の上での、先生の演出であったろうと思う。
　戦後二、三年の先生の詩のいくつかにうかがわれる、こうした華麗で甘美な内容は、うちしおれ、すさんだ青年の胸に、沁み徹るものを与えたいという、当時の先生の気持ちと、ふかいかかわりのあることだったろうと思う。

　先生のお宅にいる人は、その頃つぎつぎと代った。私は伊馬さんの指示を受けて、大井出石町のお宅へ、ときどき手伝いに行くようになった。
　二十一年の秋、先生の家にいた人は、田村秀子さんという、若い女性であった。薪を割ったり、庭を掃いたりして後、田村さんの部屋になっている玄関脇の六畳の縁側でお茶をもらって一休みし

ているとき、ふっと見ると、壁に四角な紙が貼ってあって、

　でこよ、でりかしいをたもて

と書いてあった。田村さん自身が書いたものらしかった。

顔立ちもふっくらとして、もの腰のしずかなこの女性が、こんな静かな家にいて、「デリカシイを保て」と自らを戒めなければならぬのは、どういうことなのだろうか、と私は思った。

その田村さんも間もなくいなくなった。四角な紙だけが、しばらく壁の上に貼ったまま残されていた。

矢野花子さんが京都から来て、出石の家に落ちつかれるようになったのは、その年の暮れであった。矢野さんは「婦人公論」の短歌欄に投稿して、早くから先生に歌の指導を受けてきた人で、絵や字も上手だった。年がちょうど私の母と同年で、しずかな関西弁が私にはなつかしかった。

二十二年の二月十一日は先生の誕生日だというので、千勝三喜男君と二人で、風呂の薪を作りに行った。

先生は風呂がお好きだった。ガスが使えなくなり、薪も乏しくなってからは、不要な雑誌を焚いて半日ほどもかかって風呂をわかした。一度わかすと先生は、「せっかくの風呂だから」といって、二度も三度も入られた。

この日私たちは、伐り倒された庭の椎の古木の、丸いまま縁の下に積んであったのを引き出して来て、薪を作った。地面にじかに長い間積まれていた椎の木は、水気を含んでいて、割りにくかった。

四時頃、伊馬さんが買物籠をさげて夕食の買物に出て行かれた。矢野さんは風邪をこじらせて寝

ているということで、六畳の間は戸を閉ざしたままである。葱と肉の包みをさげて帰って来られた伊馬さんの、紺絣の着物姿は、いかにも若々しくて、まだわれわれと同じ学生のような気がした。しかし実際は、連続ドラマ「向う三軒両隣り」などの作者として、多忙な日を過していられたはずである。

しばらくして、台所から、伊馬さんの米をとぎ、葱を切る音が聞えて来た。伊馬さんの手の甲が霜焼けで赤くふくれているのは、きっとこの先生の家での炊事のためだなと、私は思った。

夕方、帰るときに先生から短冊をいただいた。歌は、

　けふひと日　庭にひゞきし斧の音――。しづかになりて　夕いたれり

　紀元節に　たのしげもなく家居りて、おきなはびとに見せむ書(フミ)　かく

と、書かれていた。先生は、どちらの歌を誰にともいわないで、「取合いして喧嘩するんじゃないよ」といって、伊馬さんと顔を見合わせて笑っていられた。

私たちは「後で分けることにします」といって、おいとました。私は「斧の音」の歌のほうをもらった。

二

二十二年の二月から三月にかけては、ほとんど週に一回ずつ、先生のお宅へ行った。欝蒼と庭をおおった椎の古木の枝をおろしたり、書庫の通路にうず高く積みあげられた雑誌を分類したり、仕事はいくらでもあった。ときには、急に思い立たれた先生に連れられて、歌舞伎を見に行ったりもした。

春休みになって、明日は帰省するという日、挨拶に行くと、暇があるならちょっと手伝ってほしいといって、古い雑誌に乗った随筆を原稿紙に清書する用を頼まれた。清書し終って持って行くと、先生は机の上いっぱいに布の切れ端をひろげて、手帳の表紙に色どりよく貼りつけていられた。指先の動きはお世辞にも器用とはいえないのだが、鋏を使ったり、糊を塗りつけたり、いかにも余念なく楽しそうであった。小型の予定帳の表紙が貼りあがったところで、お茶をいただいた。

その日の先生は、きっと心がなごんでいたのであろう。私の郷里、伊勢の地名などをあれこれと尋ねては、百科大辞典の付録の地図帳の上にその場所をいちいち指でたどっていられた。そんな話の末に、先生は少し改まった口ぶりで、

「うちも矢野のおばさんが来てくれて落ちついたのだが、僕の仕事を手伝ってくれるまでは手がまわらない。伊馬は自分の家庭を持っているし、このごろは特にいそがしくしている。どうだろう、君が家に来てくれるといいのだが。こんど帰ったら、お父さんや河井の伯父さんと、よう相談して来てほしい。」

といわれた。

そんなことを、唐突に思いつかれたわけではあるまい。先生の心の中で、いろんな経緯を経てのち言い出されたことにちがいないのだが、先生の話し方は、伊勢の話から、自然に心に浮かんで来たような言い方であった。私ができるだけ重苦しく受け取らないように、という配慮であったろう。帰りぎわに、ちょうど魚屋が持って来た鰤の切身を、「夕はんにおあがり」といって一切れもらって下宿に帰った。

これは後になって矢野さんから聞いたのだが、その頃先生が、

「岡野が家へ来ることになるかもしれないが、ひとつ気がかりなのは、あれは大食漢ではないだろうか。」

とたずねられたそうである。戦後のことで、まだアルミの弁当箱などなかったから、私は木の塗り物の、容量は少ないのに一見、小型の重箱のように大きく見える弁当箱を使っていた。出石へ行くときには、それに、配給の粉で作った団子やふかしパンを入れていった。その弁当箱の大きさが、先生を心配させたのであった。当時、家へ新しい者を入れるというときには、そういうこともおろそかにできないことだったのである。

先生のいわれた河井というのは私の伯父で、伊勢の神宮皇学館を出て、昭和のはじめ、能登一ノ宮の気多神社宮司をしていたから、気多神社の古い社家の春洋さんの実家をたずねて行かれた先生を存じあげていたのである。

私が昭和十八年に国学院に入って、「伊勢物語」と「作歌」を藤井春洋という先生に習っている、と伯父に知らせてやると、早速、葉書に、

藤井春洋能登一の宮の社家の出なりよく親しみて教はりたまへ

これはしたり伊勢の生れの君がしも能登の藤井に伊勢を習ふか

という戯れ歌をしたためて、「この葉書を、藤井先生にお見せなさい」と書いてよこしてくれた。

春洋さんは、教場で出席をとるとき、「・・君」といわず「・・さん」と呼ばれた。その頃の先生には、士官学校の教官と兼任の人も幾人かあって、返事が小さいと、何度もやり直しをさせられることもあった。その中で、春洋さんのものやわらかな呼び方は、ちょっと異風であった。しかし、講義に入ると、青白い顔をうつむきがちにして、けっして無駄口をきかない話しぶりで、一年生の

私などにはちょっと近づきにくいような厳しいところがあった。

　私は伯父からの葉書をノートにはさんで、教場へは持っていったものの、どうしても春洋さんにお見せすることができなくて、二、三週間たつうちに、夏休みになってしまった。

　二学期になって来てみると、春洋さんは応召されていて、再びお目にかかることができなくなっていた。

　戦後たびたび、折口先生のお宅へ行くようになってから、何度めかに春洋さんの写真の飾られている先生の居間で、そのことを折口先生に話した。

「恥ずかしがりやが、四年もたって、やっと言づてを果たしたことになるね。」

といって、笑われた。

　先生から、「家へ来ないか」といわれてみると、私のことなど御存じなかったはずの春洋さんにつながる縁が、こんな形で後までつづいているような気がしてならなかった。

　春休みの間に伯父のところへ相談に行き、父ともよく話し合って、先生のお宅へゆく決心をして、四月二十一日の朝、上京してきた。

　九時頃、出石へうかがうと、

「今日からでもいいから、移っておいで。」

ということで、その日の夕方、先生のお宅へ移った。

　その夜は雨風が激しく、幾度か停電した。先生は起きているのをあきらめて、早めに二階の寝室に入られた。私も階下の居間の隣の六畳に床を敷いた。灯を消して、眠り難い眼を閉じていると、どこからともなく物の饐（す）えた臭いがただよってくる。時がたつにつれて、その臭いはいよいよ濃く、

夜の部屋の闇を満たしてくるのである。そのうちに突如、「ポン」とシャンパンを抜いたような音と共に、液体の噴きこぼれる気配がする。思いきって立って行って、先生の居間の灯をつけてみると、床の間に、果物の箱や籠が積みあげられていて、下積みのものは、すでに果物の形もわからぬ程に崩れている。そばに二、三本の一升瓶が立っていて、薄青く濁って醗酵した液体が入っている。そのうちの一本が、栓を吹きあげてこぼれたのであった。

翌朝、「あの傷んだ果物はもう捨ててしまってはどうでしょう」と言うと、先生は複雑な表情を浮かべたまま、口をつぐんでいられた。

次第に先生の生活に馴れるにつれてわかってきたことだが、先生は果物や野菜はあまり好きではなかった。しかし、人から贈られたものは、自分が食べられぬからといって、他人に分け与えたりはなさらなかった。一升瓶の中で醗酵しているものは、傷んできた果物を自分で長い時間かけて刻んだりすりおろしたりして作られた、手製の果実酒だった。先生の食物に対する執意や、贈り主に対する感謝は、いつもそういう形で示された。

部屋に立ちこめてくる饐えた物の臭いに馴れてゆきながら、私はこの家の隅々にまでゆきわたっている先生の生活に対する執意と秩序の微妙さや厳しさを、これからどのように理解してゆけばいいのかと、思い迷う夜が多かった。

それから一週間ほどたってからであった。先生が、二階の寝室になっている六畳の間に私を呼んで、押入れにしまってある大きな茶箱を示された。蓋を取ってみると、中には白米がいっぱいつまっていた。

およそ四斗ほどもあるその米は、戦争末期から敗戦直後にかけて、出石の家の台所をあずかって

いた若い女性、乾（いぬい）民子さんが、何度も何度も買い出しに行って、貯えたものだった。

その乾さんも、突然、黙って先生の家を出ていった。

「ある日、すっかり暗くなってから、疲れきって学校から帰ってくると、玄関に錠がかかっていて、いくら呼んでも乾が出てこないんだよ。おかしいなと思って、郵便受をさぐってみると、鍵と、夕食のためのメリケン粉の団子が三つ、皿にのせて置いてあった。あのときは困ったね。ほんとにどうしようかと思った。結局、石川富士雄君に頼んで、あそこのお爺さんとお婆さんに来てもらったんだが……」

米櫃を前にして淡々と話していられるのだが、真っ暗な玄関先で、団子の皿を手にして途方にくれて立ちつくしていられる疲れきった先生の姿が、いま眼の前で現実に話していられる先生の姿とかさなりあって、ゆらゆらとゆらめきたってくるような、妖しい切迫感があった。

「乾も、あんなにして家を出ていったけれど、春洋のいなくなった後の、いちばん苦しい時期、私の生活を守ってくれた。買い出して来てくれた米は、手をつけないで、貯え貯えして、これだけの量になった。これだけあれば、不測の事がおこっても、何か月かは家の者が命を保ってゆけるだろう。」

といわれた。

米の中には虫のつかぬように、多量の硼砂がまぜてあった。しかも、二年も三年もたっているのだから、艶もなく灰色に黒ずんでいて、これが食べられるのだろうか、という気がした。

この年の十一月に発表された「白玉集」と題する連作の中に、次のような歌がある。

白玉（シラタマ）のごとくたふとし。み仏に　とぼしき飯（イヒ）を　盛りて　奉（マツ）れば

山の木に花咲く見れば、米のいひ　三月四月も　喰はずなりけむ
ものおもひなく　我は遊べど、鳥の如　夜目ぞ衰ふ。米を喰はねば
米の音　あな微妙(イミ)じよと　死にゆきし　昔咄しも、笑へざりけり

白米を白萩(しらはぎ)さまと尊び、瀕死の者の耳もとで、筒に入れたわずかな米を揺って聞かせてまじないにしたという、昔の日本の農民の貧しい苦しみを、戦後の日本人の多くは再び現実に体験していたのである。闇買いをしない清廉な法官や学者の、栄養失調による死が世に伝えられたのも、その頃であった。

先生にとって、四斗の米は、食べられるかどうかなどということを超えた、心の拠りどころであり、護符のようなものであったのだろう。

そして、その米を示されたことは、先生の家の一員となった者への、家入りの式のようなものだったろうと思う。

茶箱の中の米は、その後も、一度も手をつけることなく、先生が亡くなられて、出石の家をあけわたすまで、寝室の押入れの中にしまわれていた。

間もなく、出石の家では、私は先生から「おっさん」とよばれるようになった。格別の理由があったわけではない。矢野さんが「おばさん」であり、私が「おっさん」であった。

先生の門弟の中には、「おっさん」とよばれる人が前からあって、私はその三代目にあたるらしい。確かその初代は、今宮中学での教え子、林福雄氏で、いつか林氏が出石へ来られたとき、

「今日は初代と三代めの対面だね。」

と先生がいわれたことがある。

先生の家の生活は、けっしてじめじめとした陰気なものではなかった。だが先生自身が、貪婪な生活の享楽者であったから、きわめて自由でのびやかでありながら、家の隅々、こまかなしきたりにいたるまで、強烈な個性を持つ先生の心の秩序がゆきわたっていた。

伊馬さんは自宅にいられることが多くなり、先生の用はほとんど私の役割になった。出石の家に張りめぐらされている生活律の一つ一つを自分独りで理解し先生の心にかなうように処理してゆくことは、なかなか容易ではなかった。はじめの半年くらいの間は、とまどったり、抵抗を感じたりすることばかり多かった。

私自身も、かなり我儘で、我の強い面を持っている。そうたやすく、先生の生活に入って行けるわけはない。そういう折々の私の感情は、また、すぐに先生に見すかされて、さき回りされてしまう。

「おっさんはいま、ふくれているな。一体、なにが気にいらないのかね。」

説明のしようもないから黙って坐っていると、

「そら、ますますふくれてきたよ。」

ちょうど、昔話にあるように、人の心の中を読みとる妖怪に、先へ先へと、心の底を見すかされてゆく木樵のような、やるせないいらだたしさである。

ええ、それならもう、おおっぴらにふくれてしまえ、と思う。するとまた、

「春洋も、家へ来てしばらくは、そんな顔をしてよくふくれたね。とうとう行李をかつぎ出して、もう出て行くといったことも何度かあった。ほんとに出て行って、金（鈴木金太郎氏）が、大森の

駅から連れもどしたこともある。結局はもどってくるのに、何をあんなに怒ったのかしらん。」と、わざと他人ごとのような顔で、さき回りして、私の行動を押えてしまわれる。たいていは、伊馬さんが留守で先生と二人きりのときだから、私は引っ込みがつかなくなってしまう。

そんなときは、庭へとび出していって、椎の古木にのぼって、鉈をふりまわして茂りすぎている枝を叩き切ったり、裏庭の雑草を鎌で薙ぎ倒したりしていると、だんだんと心が鎮まってきた。

雨の中で、二時間も三時間も、椎の木にのぼったままでいることもあった。

頃合を見て、先生は居間から出てきて、

「お茶を入れたよ。」

と声をかけられる。

それでも強情を張って、そ知らぬ顔をしていると、先生は二階へ上ってきて、菓子を入れた紙袋に長い紐をつけ、手すりから吊りおろして、魚を釣るときのように、ちょい、ちょいと、紐を引いたり伸ばしたりして、

「これ、いらないのかね。おいしいお菓子だよ。」

などといって、笑っていられる。

先生にこんなにまでさせて、俺は何を怒っているのかしらんと、泣き笑いの思いが、心の底からにじみ出してくるのであった。

先生はちょっとした軽妙さで、生活に楽しいはずみをつける術(すべ)をよく知っていられた。町を歩いていて、エノケンの顔を描いた看板が出ていると、

「この人の親類はだれ。」

ときかれる。ははあ、と思って、黙っていると、
「それがわからないような人は、もう芝居に連れて行かない。」
といって、すたすたと歩いてゆかれる。あわてて後を追っかけて、「伊馬さんでしょう」というと、
無理に真面目な顔になって、
「あれ、おっさんは杏伯（伊馬さんのあだ名）が、エノケンそっくりだといったな。いいつけてやろう。きっと怒るぞ。」
などといわれる。

お茶のときに、幾つもの茶筒を机の上に並べておいて、「赤か緑か」ときかれる。紅茶か、緑茶か、ということだろうと思うから、「赤」と答えると、
「赤の他人には、なんにもあげられない。」
といっておいて、実は茶羊羹と赤い練羊羹を出してきて、赤いほうを切ってくださったりする。

なぞなぞ、地口などの言語遊戯が巧みであった。しかし、人にむかって、皮肉めいたもの言いをすることは大嫌いで、言わなければならぬことはずばりと言われた。
「下手な皮肉は、気のぬけたわさびみたいなもので、相手に軽蔑されるし、よく利いた皮肉は、相手に反感をおこさせるだけだ。歌でも、皮肉が露骨に見える歌は、その作者が軽蔑される。」

出石へ行って間もない頃、先生と散歩しているときにいわれたことばである。その頃の私に、いましめておかなければいけない何かを感じて、こう言われたのであろう。

珍しい物をもらうとき、犬の啼き真似をさせられることがあった。伊馬さんも私も、「ワン」といいなさいといわれれば、すぐ「ワン」といえた。矢野さんだけは、どうしてもそれをいさぎよし

としなかった。しまいには、矢野さんはぷりぷりして、自分の部屋にとじこもってしまう。先生も、

「女は心のゆとりがなくて、だめだ。」

と、しらけたような顔になってしまわれる。

他愛ないことである。しかし、どこの家庭の家族のあいだにも、他人がのぞけば奇妙に見えるような、その家族だけに通用する心の通わせ方があるにちがいない。

先生の育たれた、大阪の町家の生活、殊に、女の尊属を幾人ももっていられた、幼い頃の家の団欒の姿が、先生の心にずっと生きていたのではあるまいか。そして、先生が家の者に犬の啼き真似を要求されるとき、ほがらかに見えて、実は心の底に、もやもやと、ふさぎの虫が顔を出しはじめていたのではなかったろうか。

どうかすると、そのふさぎの虫が、先生の心を重苦しいまでにおおいつくしてしまうことがあった。強い風が吹いて、家のガラス戸ががたがたと揺れる日、からっ風が、ざらざらと埃を家の中まで運んでくる日などに、それが多かった。それは、原因のはっきりした怒りとは違って、何の理由もなく、先生の心に這いよってくる欝々の情であって、先生自身もわれわれも、ひっそりと、心の霧の晴れるのを待っているより仕方がなかった。

三

先生の蔵書は、いま、折口博士記念文庫として、国学院の図書館の一画に保存されている。雑誌を含めて、一万冊ほどになる。もっとも、出石の家をひきはらうとき、短歌雑誌や文芸雑誌の多くは、幾日もかけて庭で焼却してしまった。後に全集を編集するときになって、その思い切りのよさ

がしきりに悔まれたことであった。
出石の家では、それらの蔵書は、玄関を上ったつきあたりの十畳あまりの書庫にびっしりと収められ、あふれたものは、廊下や一階の部屋のあちこちに書棚を設けて、積みあげられていた。この十畳の板の間は、昭和三年に出石に移ってしばらくの間は、がらんとした空き部屋で、たずねてくる学生たちの控えの間として使われていたそうである。だから先生の蔵書のほとんどは、出石に移ってのち、買いためてゆかれたものといえよう。

一階の居間の先生の座のうしろには、幅一メートル五十、高さ二メートルほどの六段に区切った書棚があって、辞書を主とした百冊あまりの本が収められていた。ときにはその中の何冊かが入れ替えられることもあり、ある時期に特殊な目的で読まれた本が、書庫に返されずにそのまま残ってしまうこともあったが、この百冊が、まず、先生の座右の書といってよいであろう。先生の歿後、池田弥三郎氏が撮られた写真によって、その書名を記しておく。

いちばん上段に、大言海・日本文学大辞典・大日本国語辞典・万葉集年表（土屋文明編）・仏教大辞典。

二段め。源氏物語湖月抄（活字本）・源氏物語新解・元禄文学辞典・西洋人名辞典・国史大辞典・歳時習俗語彙・死者の書（自装本）・読史備要・源氏物語用語和歌索引・源氏物語精粋・古代感愛集（自装本）・全国方言辞典・民俗学辞典。

三段め。源氏物語新釈・源氏物語用語索引・尾州家河内本源氏物語解題・六国史・平安時代文学と白氏文集・能楽源流考・古代研究・角川版昭和文学全集「亀井勝一郎・中村光夫・福田恆存集」（この本などは、先生晩年の読書が、そのまま棚に残っていたのであろう）・古典の新研究・かぶき讃。

四段め。浮世絵辞典・雪国の民俗・定本万葉集・万葉集大辞典・万葉集総索引・姓氏家系大辞典・幸若舞曲集・三体字典・俚言集覧・雅言集覧・日本文学の発生序説。五段め。支那学芸大辞典・国歌大観・続国歌大観・大日本地名辞典・日本分県地図帳・続々歌舞伎年代記・台記（史料大観の一冊）・天体力学の基礎。

並んでいる本のうちで、いちばんいたみの眼につくのは、『大日本地名辞典』と『続国歌大観』で、先生の手であちこちつくろってある。『国歌大観』も随分よく使われた本で、書き入れや訂正もあり、破損もひどかったが、写真では戦後の新版に入れ替えられている。

地方からの初対面の客とゆっくりと話されるときなど、客の姓を『姓氏家系大辞典』にあたり、その郷土を『大日本地名辞典』にあたり、さらに『分県地図帳』にあたって、話題をすすめてゆかれることが多かった。

『続々歌舞伎年代記』には、目じるしのための紙片が、いっぱいさしはさまれている。

『天体力学の基礎』は、今宮中学での教え子、萩原雄祐氏の著書で、萩原さんがその本を持って来られたとき、

「僕も、少しはこんな本を勉強することにしよう。」

といって書棚に置かれたが、読んでいられるのは、あまり見たことがない。あるとき、神田の本屋で啓蒙的な星座図を私が見ていると、先生がそばへ来て、

「そうそう、萩原が中学生の頃、星座の本を買ってやったことがあった。案外、そういうことが萩原の天文学に進むきっかけになっているのかもしれないね。君にもそれを買ってあげようか。」

といって、星座図を買ってもらったことがあった。

この棚には置かれていないが、先生愛用の書で忘れられないのは、植物図鑑である。村越三千男著『新植物図鑑』と、本田正次著『全植物辞典』の二冊で、後の方は色がついている。いずれもコンサイス判の手軽な本だが、すり切れてぼろぼろになった表紙は、先生の手で丹念につくろわれている。歌集『水の上』『遠やまひこ』に使われているカットは、『新植物図鑑』のウメガサソウの一部分を、先生の希望で用いたのだった。

図鑑は野を歩くときだけに持ってゆくのではなくて、書斎でひっそりとした余暇を楽しんでいるときにも、図鑑を取り出して、気随にあちこちのページを繰っていられた。コンサイス判の一ページをさらに四つに分けた小さな区画のなかに、葉脈のはしり方、花弁のよじれ具合までが正確に描き出されている、野の花山の花の姿を見ているうちに、過ぎてきた旅のひとこまひとこまの記憶のよみがえってくるのを、楽しんでいるといったふうであった。

ときには思いたって、廊下の隅に並べてある、大部な『本草綱目』をひき出し、読みふけっていられることもあった。

そういえば、旅中の先生は、道ばたの草花をふっとつまみ取って、携えている本や手帳の間にはさんでおかれることが多かった。いまでも、先生の蔵書を開いていると、思いがけないページの間から、からからに乾いたタビラコやマツムシソウの押し花が、はらりと手の中に落ちてきて、なつかしい思いをさせられることがある。

さて、本棚の、坐ったままで手のとどく三段め四段めのあたりには、アラビア糊、ウオーターマンのセピアや緑のインク、インク消し、クレオソート丸の小瓶などが、幾つも、本の前に並べてある。

本棚のいちばん下の段には本はなくて、大小さまざまの三十ほどの茶筒が並んでいる。芽茶・玉茶・抹茶・玉露・ほうじ茶・蒙古の磚茶・中国の包種茶・各種の紅茶・コーヒー、それに乾燥卵（卵黄を粉末にした戦時中の保存食）や、せんべいなどが入れてある。

書棚の前の切り込み炬燵のやぐらの上に、黒くつやのでた松の厚板を置いて、それが机代りになっていた。いつもその上に置かれているのは、専用の大きな湯呑み、ゾリンゲンのペーパーナイフと鋏である。人と話しながら、手があいていると、この鋏を爪にあてていられる。だから先生の爪は、いつも深く切り込まれていた。

居間にはもう一つ、西北の隅に三角形の書棚があって、新刊書や、毎月の雑誌を並べておくことになっていた。この棚の本は交替がはげしいわけだが、矢内原忠雄氏のキリスト教に関する書物数冊は、三、四年の間、書庫に移さずに、ずっとここに置かれていた。

一日のうちに二、三度、この書棚から思いついた本を取りあげ、膝のあたりにはたはたと打ちつけて埃を払うしぐさをして、懐に入れてお手洗いに入ってゆかれる。先生のお手水（ちょうず）は長い。出てこられるまでの三、四十分の間に、「人間」や「展望」なら一冊、薄い雑誌なら二、三冊の、主要な部分には眼を通していられたようである。

そうして読みおわった面白いものは、洗面所への通りすがりに、私の机の上へ黙って、ぱたりと、置いてゆかれる。いわば先生の推薦図書なのだが、読まれる場所が場所だから、あまり部厚い専門書はない。出石へ行って最初の頃、雑誌のほかに私の机に置かれた単行本は、『延若芸談』、小島政二郎著『眼中の人』、創元選書の『泡鳴五部作』、大仏次郎著『乞食大将』などであった。

出石の家のお手洗いは、先生用と客人（まれびと）用、私ども家人用と別々になっていた。家人用のお手洗い

の白壁は、ちょうど眼の高さのあたりが、黒く傷になっていた。おそらく春洋さんも伊馬さんも、知らず知らずのうちに先生にならって、お手洗いでの読書の習慣がついてしまって、この壁に本の背をもたせかけていられたのだったろう。私など、先生の習慣を真似ようなどと思ったこともない。ただ、この誰にも邪魔されることのないしずかな場所での読書だけは、先生につられていつの間にか連鎖反応のようになって、やがて私の習癖の一つとなってしまっている。

二十二年には、『古代感愛集』『死者の書』『日本雑歌集』『短歌啓蒙』『日本文学の発生　序説』『迢空歌選』と、六冊もの先生の著書が新刊・再刊された。そういうときには、扉に「弘彦分」「弘彦本」、または「弘彦に」と書いて本をくださった。こういう書き方で、いちばんやさしいのは「春洋にあげます」ということばである。私には、そういうふうに書いてもらった本はない。

先生の探偵小説好き——まだ推理小説とはいわなかった。探偵小説、探偵もの、といわないと先生の感じが出ない——については、幾つかの思い出がある。

敗戦後間もないある日のことだった。渋谷の国学院の前の坂を、英文学の菊池武一教授と先生とが、夢中で何か話しながら下ってゆかれる。きっと東西の文学についての深遠な会話が交されているのだろうと思って、そっと後から近づいて耳をそばだてていると、シャーロック・ホームズということばがたびたび聞えてくる。何のことはない。ホームズ探偵の話に夢中になっていられるのだった。菊池教授の訳された岩波文庫の『シャーロック・ホームズの冒険』は中学のときに愛読していた。お二人の会話を盗み聞きしながら、なるほど大学というところは随分楽しいところなのだなあ、と私はすっかり嬉しくなっていた。大袈裟なようだが、戦いは終ったのだという実感があった。お二人の下ってゆかれる廃墟のような渋谷の丘の向うに、夕映えの小さな富士山が、くっきりと浮

かんでいたのを覚えている。

先生の家へ来てみると、外国の探偵小説が沢山あった。「詩学」へ詩を発表されると、原稿料はいいから、同じ社から出している「宝石」を毎月送ってくれるようにと頼まれた。

箱根の山荘にいるときなどは、先生が探偵小説を私の部屋へ持って来て、「僕はこのページまで読んだら、犯人がちゃんとわかったよ。君もここまで読んでごらん。当てっこしよう。そこから先を読んだらずるいよ」といって、本を置いてゆかれる。指定のところまで読んで、苦心して推理を組み立てて、夕食の後などで話すと、いろいろ意地悪い質問をして、私の推理をめちゃめちゃに壊してしまわれる。「僕ら戦時中の学生は、感性だけを信じて生きてきたから、論理構成は弱いんです」と正直に兜をぬいでも、「だから、その論理の訓練をしてやってるんじゃないの」となかなかしつこいのだ。

あんまりじれったくてくやしいから、そっと結末のところを読んでみると、私の推理がぴたりと当っている。自信を得て翌晩またそ知らぬ顔で私の推理を述べたてると、先生はすぐ察して、「おっさんはずるい。しまいのところを見たんだ」。そこでこっちははじめて気がつく、「あっ、先生も見たんですね」と大笑いになってしまう。

芝居には毎月欠かさずに行かれるのに、映画はほとんど見ようとなさらない。その先生も、「ジキルとハイド」「毒薬と老嬢」「硫黄島の砂」の三つだけは御覧になった。先の二つは勿論、推理ものである。そして亡くなられる前、箱根で読まれた本はクロフツの『マギル卿最後の旅』であった。

ラジオも「話の泉」と「二十の扉」だけは興味をもっていられて、くつろいだときには、私たちに問いかけられることがあった。先生のヒントはいつも複雑すぎて、なかなか当らなかった。「オ

ール読物」に毎号、何ページか載っている外国漫画も、楽しそうに見ていられた。私が会話や説明のことばの多いほど低級漫画で、絵だけのものが高級漫画だ、といったら、「うん、それはおっさんの卓見だ」とおっしゃった。

二十二、三年頃、銀座の夜店で買ったアメリカのソルジャー判の漫画の本――こういうものを買われるのは、ユーモア作家の伊馬さんの刺戟によることが多い――を見ていて、「おっさん、ちょっとこれを見てごらん」と呼ばれる。のぞいてみると、椰子の木の生えた小島に二、三人のアメリカ兵が上陸していて、その前に槍を持ち腰蓑をつけた土人が白旗をかかげて整列している。その列から一歩前に進み出て、色のやや白い、越中褌をつけた人物が、土人の列を指さしながら、「彼らが私を神というのだ」とアメリカ兵に訴えている。

「これを見てどう思う」とおっしゃる。日本人に対する痛烈この上もない諷刺で、どうにも答えようがない。見ていればいるほど、心に不気味なものが湧いてくる。先生の顔もだんだん真剣になっていった。「彼らはこういう形で、自分たちの士気をふるいたたせていたんだね。口先で神風が吹く、神風が吹くと言っていたのとは、大きな違いだね」といわれた。

その後何度か講演の中で、先生はこの漫画を引用して、日本人の文化について、厳しい反省を述べられた。この漫画は、先生の心に大きな衝撃を与えたのにちがいない。

先生の居間は毎日掃除をするから、本に埃の置くことはないが、書庫の埃にはいちばん苦労をした。潔癖な先生は、本の上にちょっとでも埃が見えると、手にとるのも気持ち悪そうにされた。本の上には、必ず埃が積もっているものと思い込んでいられるように見えた。

書庫にびっしりと並んでいる本、廊下にあふれ出て横積みにしてある本、はたいてもはたいても、埃は隣へ移動するだけである。家が古いために、天井裏には埃がたくさん積もっているとみえて、風の強い日は、書庫の天井板の隙間から、ざらざらとしたものの降ってくるのが眼に見えた。二、三日がかりで、庭の筵の上に本を運び出してきれいにしても、ひととおり終る頃には、はじめに手をつけた棚の本には、もう埃が置いている始末であった。

一時は、柳田先生のお宅の書棚の真似だといって、並んだ本の上に新聞紙を敷きのべて、直接埃のかからぬようにしたが、あまり効果はなかった。

私は書庫の本を、自分流に並べ変えて、入用の本は先生に言ってもらって、私が取りにゆくことにした。それでも、自分でどうしても書庫に入りたいと思われるときがある。そういうときは、先生は着物の左袖で眼から下をおおって、右手は袖を手袋代りにして、本をつまみあげていられた。それも日によって、ひどく気になる日と、気にならぬ日があるとみえて、ときには書庫の埃まみれの板の間にうずくまって、眼鏡のつるを片方だけ耳からはずし、そのつるの先端を平気で口にくわえて、夢中でこまかな字に読みふけっていられることもあった。

普段は、襖や障子のあけたてにも、取手にじかに手の触れるのを嫌って、着物の袖をグローブの代用のような形にして使われたから、冬物の袖などは、そこだけがすれて光っていた。電車の吊り皮を握るためには、いつもハンチングをぬいで、その外側の方を吊り皮にあてて持たれたし、梅雨の頃になってもわざわざ手袋を持っていられることもあった。混みあった電車やバスの中で、ふと、女の髪の毛が顔や手に触れたときの、先生のすさまじいばかりの嫌悪の表情は、今も忘れられない。

汲取屋が入って来る気配がすると、敏感に聞きつけて、肱全体で眼から下をおおって、まるで冷

たい風呂に我慢して浸っているような姿で、息をつめていられた。しかし、先生の鼻の粘膜は、以前、コカインを乱用されたときにすっかりいためられて、嗅覚はほとんど失われていたのだから、その先生の動作は、汲み取りの音によってよびおこされる、嗅覚の記憶に対する、反射行動とでもいうべきものであったろう。だから、汲取屋が、門の脇のくぐり戸を開けて出てゆく音がすると、途端にほっと体をゆるめて、息を吐いていられる。それが現実の臭気と無関係なのだと私にわかったのは、だいぶん時日がたってからであった。抹茶茶碗や茶筅まで、クレゾール液で消毒して、その臭いのぷんぷんしている茶を、平気で飲んでいられるようなことがたびかさなって、やっと、先生の嗅覚が失われていることが私にわかったのである。

そういう先生の敏感で潔癖な所作に馴れるまでは、それを見ているだけで、こちらの神経が疲れた。工場や軍隊での粗雑で無神経な生活を強いられた記憶のまだなまなましい私などは、先生のあまりの清潔好きに、はじめのうち、強い抵抗を感じることがあった。

先生が亡くなられて間もなくのこと、「鳥船」の同人の石上順氏から聞いた話である。石上さんは南方の島で辛うじて生き残って、信州の妻子のところへ復員する途中、衰弱した体をしばらく先生の家に寄せていられたことがあった。ある日、先生が、

「書庫の中で鼠が死んでいる。気持ちが悪くて入って行けないから、片づけておくれ。」

といわれた。

少し前まで、戦友のつぎつぎに死に絶えてゆく苛烈な場に身を置いていた石上さんにとって先生のことばは何となく、素直に従えないような、反撥を感じさせたのだろう。一週間の間、何度いわれても、素直に片づける気にならないまま、先生のところを辞してしまったのだという。

「あの頃の俺はどうかしていたんだな。それからのち先生の顔を見るたびに、そのときのひねくれた思いあがりが、悔しくてしようがなかった。」

石上さんはつくづくとそういわれた。しかし、私なども、そういう感情のくいちがいは、しばしば感じなければならないことであった。

潔癖な人ほど、自分勝手なところがあって、他人のしたことは気になっても自身のことについては、あまり気にならないものである。そして常に、自分勝手を正当化するための、不合理な理論がともなう。先生だとて、けっしてその例外ではなかった。

だが、半年、一年とたつにつれて、先生の痛烈にきびしい孤独の領域、いさぎよいほどの自愛の世界に私は眼を見張り、その張りつめた生き方を、私なりに理解できるようになっていった。

二階の寝室に入られた先生が、夜半にひどくうなされて、その声が私の部屋までとどいてくることがよくあった。ある夜、その声があまり長くつづくので、二階へ上っていって、先生を起こした。翌朝になって、

「ゆうべは、うなされていたらしいね。しかし、一度寝室に入ってしまったら、僕独りの世界なのだから、どんなことがあっても起こさないでおいてほしい。」

といわれたことがあった。

また、先生はどんなことがあっても、自分の肌につけているものを、他人の手に触れさせることがなかった。先生の肌のものを私が洗ったのは、体の自由が利かなくなった、箱根の最後の一週間だけである。

関西の男の習慣で、先生も布を腰に巻いていられた。それは落下傘用のやわらかくて丈夫な絹地

で、渋い緑色に染められていた。入浴の後などで、先生はそれを洗って、外に干すことをしないで、寝室に張り渡した綱に干しひろげておかれる。夜が更ければその下に床を敷くのである。冬の夜など、寝床の上に、冷たい雫がしたたり落ちるのではあるまいか、と案じられた。

頭の上にゆらめいている、自分の肌(はだえ)の布の下で、孤独の眠りにつかれる先生の姿を、その階下の部屋で、しずかに思い浮かべていると、何かものすさまじい思いがしてくるのだった。

そういう習慣は、一体いつから先生の身についたのであったろうか。いくら馴れしたしんでいる者にも、聞くことのできない事柄であった。

四

出石の家へ来て一月あまりたってから、先生につれられて、玉川上野毛の石川富士雄氏のお宅へ行った。石川氏は戦争中から戦後にかけて、国学院の教学・経営両面にわたって、きわめて精力的に敏腕をふるった人であり、また先生に対して深い傾倒を示した人でもあった。先生はあらかじめ電話をかけて、「岡野も顔見世につれてゆきます」といわれた。

私は予科の教室で二年間、石川さんの講義を受けていたし、お宅へも、それ以前に、すでに二、三度うかがっている。だから、「顔見世に」といわれたのは、出石の家の者となっての、挨拶につれてゆきます、ということであったのだろう。私にとって、石川さんという方は、最初の印象があまりにも強烈であった。

大学予科の入学試験のときだった。学科試験を終って、面接になった。私が神宮皇学館の普通科出身でありながら、皇学館大学に進まないで国学院を志望する理由について、配属将校からつぎつ